

特集

意外と知らない 町の文化財

☎教育委員会事務局生涯学習係 ☎0943-32-0093

はにわポーズ



文 化財とは、日本全国、そして広川町の長い歴史の中で生まれ育ち、今日まで地域で守り伝えられてきた財産のことです。専門家による調査や審議会による選定などを経て、歴史的・技術的・学術的に価値が高いと認められたものが、保護の対象となります。

灯 台もと暗しということわざがあるように、私たちは生活の中で、意外と身近にある文化財に気づかないものです。現在、広川町には国指定2件・県指定4件・町指定20件の文化財があります。古い建物や史跡のほか、形として存在していない演劇や音楽、各地の伝統的な祭りなども、文化財と呼ばれるものの一つです。

「NPO法人広川町歴史と文化を守る会」では、3・6・11月に町内各地の文化財を巡るふるさとウォークを行っています。開催日時や場所は、随時本紙でお知らせします。興味のある人は、NPO法人広川町歴史と文化を守る会（担当：萩尾 ☎090・3605・7275）へご連絡ください。

国 指定文化財「八女古墳群」を代表する装飾古墳「石人山古墳」と「弘化谷古墳」。石人山古墳の北側にある広川町古墳公園資料館（こふんピア広川）では、広

川町の古墳文化を体感することができます。古墳時代の集落から出土した土器類や、石人山古墳から出土した埴輪・須恵器、日本に数例しかない銀象嵌柄頭など、貴重な出土品も見学できます。

古墳公園資料館（こふんピア広川）

〒834-0122 広川町大字一条1436-2

（西鉄バス「一条」から徒歩15分）

☎0942-54-1305

駐車場：あり（80台） 入館料：無料

開館時間：9:00～17:00

休館：（月）・年末年始（12/28～1/4）

（月）が祝日の場合、翌日以降の直近の平日が休館



文化財 MAP

①～②国指定文化財 ③～⑥県指定文化財 ⑦～②⑥町指定文化財
※③～⑪は個人所有のため、地図上に示していません。

①八女古墳群 (石人山古墳・弘化谷古墳・善蔵塚古墳)
5～6世紀、八女丘陵上に築かれた九州を代表する古墳群。そのうち3つが広川町所在。

②武装石人
石人山古墳の石棺を守るガードマン。古墳時代の武具を着た武人を表している。

③稲員家文書
江戸時代に代々大庄屋を務めた稲員家に保管されていた文書。

④久留米緋織締
久留米緋の技術「織締」。織って糸を締めて、染め、それをほどくという作業。

⑤⑥滑石経
法華経の経文が刻まれた滑石製の瓦状の石板。

⑦馬場文書
江戸時代の地元寺院や人名に係る民政史料 (15通)。

⑧氏子札
明治時代初期の戸籍整備に関わる極めて重要な民俗資料。

⑨岩戸山辞
岩戸山古墳の地名の由来や起源に関する史料の1つ。

⑩高良玉垂宮縁起
高良大社に関わる貴重な巻子本。

⑪下廣川村役場民政資料
海外渡航・選挙記録・特別大演習の収支計算簿などが綴られた下廣川村役場の書類。

⑫梯大神社小絵馬
同じ奉納者が還暦と喜寿を感謝して奉納したであろう、民俗的に貴重な絵馬。

⑬馬場古墳群
古墳時代後期 (6世紀後半) の円墳。

⑭木造十一面観世音菩薩立像
長延区の東福寺に安置されているご本尊。東福寺創建の資料が本尊内から発見されている。

⑮あかがり地蔵
ひび・あかぎれに効力があるという異名地蔵の1つ。

⑯社日神像
農耕神を表した町内最古の束帯装束の神像。

⑰太原早玉神社農耕習俗絵馬
1年間の農作業が描かれている絵馬。作者は久留米藩御用絵師の流れをくむ人物。

⑱木造千手観世音菩薩立像
江戸時代初期、高間天満宮の鳥居脇に安置された仏像。

⑲庚申・猿田彦塔群
自然石製。庚申信仰の所産となるもの。

⑳御井・上妻郡境石
元禄年間設置から現在の土地にある郡境石。

㉑清楽茶屋素蓋鳴神社獅子舞
江戸時代末期から行われている無病息災・悪病退散の行事。

㉒猿田彦大神搭
道案内に関わる「猿田彦大神」の字が彫られている。

㉓増永祇園神社丁切
増永区の祇園祭のときに立てられる楼門状の建造物。

㉔一條六地藏自然石板碑
室町時代後期、太閤道の辻に立てられた六地藏塔婆。

㉕一條八幡宮鳥居
享保5年 (1720年) に建てられた町内最古の鳥居。

㉖智徳熊野神社子供風流
智徳区で行われている鎮守社の祭り。



PICK UP

町指定文化財のうち、行政区で保存会がつくられ、地域で継承されている民俗芸能をご紹介します。



増永祇園神社丁切

(町指定第1号)

2年に一度、増永区で行われる祇園祭のとき(7月末)に立てられる楼門状の建造物。1本の釘も使わずに組み立てられ、飾り提灯が下げられます。丁切は「町切」とも書かれ、かつては町内各所に見られましたが、現在は増永区にのみ残ります。

平成28・29年度に丁切の各部材が老朽化し、組み立てが難しくなったため、残せる部材以外は同じ材木で、元の図面どおりに修繕されました。



清楽茶屋素盞鳴神社獅子舞

(町指定第2号)

江戸時代末期に清楽茶屋で疫病が流行し、無病息災・悪病退散の行事として獅子舞の回巡が行われました。第二次世界大戦中も中断することなく行われ、現在まで受け継がれています。

旧暦6月15日に近い日曜日に祭礼があり、清楽茶屋区・清楽区・高間区を赤色と青色の獅子がまわります。古記録によると、2体ある獅子頭のうち、古いものは慶応3年(1867年)に造られたとあります。



智徳熊野神社子供風流

(町指定第17号)

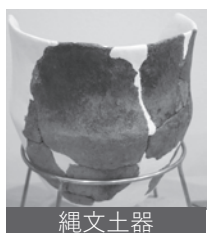
さまざまな願いが叶うようにと智徳区で行われている鎮守社の祭り。シャグマ(演者が頭に着ける飾り毛)を付けた小学生の男の子が、太鼓や小鐘、囃子方(演者)の声に合わせて風流を舞います。その音から別名「ドイドイキャンキャン」と呼ばれています。

智徳区は8つの座組みから成り、毎年12月16日にその年の座元の家から、次の年の座元の家まで練り歩きます。

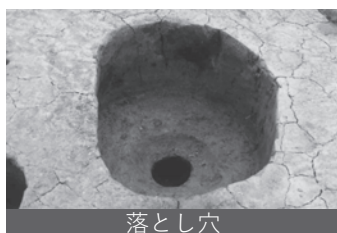
古代の人は何を食べていたの？



古墳時代の食生活を再現したもの



縄文土器



落とし穴

約1,300年前の古墳時代の人々は、稲はもちろん、ヒエなどの雑穀を栽培していました。山野や海川の恵みもあり、食生活は意外と豊かなものだったと考えられます。

栗やドングリなどの木の実をとり、イノシシなどの動物も狩っています。これらは保存食として加工され(焼く・蒸す・燻製)、貯蔵穴などで保存されていました。現在、ドングリは食用とされていませんが、古代の人々はアク抜きをした後、粉碎し、クッキー状にして食べていたようです。

縄文時代では、狩猟・漁労・採集を中心とした生活を送っていました。落とし穴などで捕獲した獣の肉は、直火であぶって食べられますが、アク抜きをした木の実や貝などの魚介類は、器を使わないと加熱することができません。そこで当時の人は、土器を使い、木の実や魚介類を加熱していました。久泉遺跡の縄文時代晩期(約3,000年前)の住居から、調理や貯蔵、祭りに使われていたと考えられる深鉢や有文鉢などの縄文土器が数多く出土しています。